

自然を通して子どもが感じる「たのしい」とはなにか？

～園外保育から見えてくるもの～

発表者	西村絵理香（愛真幼稚園）
発表者	前嶋 美香（愛真幼稚園）
指導助言者	近藤 剛（鳥取短期大学教授）
司会者	安東 裕子（愛真幼稚園）
記録者	井上 幸音（愛真幼稚園）

1. 研究概要

(1) 目的

本園では「あそびの保育」を教育の基本とし、『生命力、生活力に溢れた元気いっぱいのこども』“意欲をもって、主体的に生活を創造していく子ども”が目指す子ども像の姿と考えている。そのための1つの保育内容として、自然を身近に感じて触れていくことを大切にしている。本園では多くの自然体験の場に多く出かけている。園外保育には年間約20～30回、海、山、川、森の中の散策など子ども達は園外での自然体験でたくさんの自然に親しみ、生き生きとした姿で遊ぶ子ども達が多く見られてきた。

園外保育を計画していく中で保育者主導で活動を立案することが多い。園外保育を終えるたびに『たのしかった』と声は聞かれるが、一体どのような気持ちで楽しんでいるのか、環境が変わることで『たのしい』という気持ちに何か変化はあるのか、保育者の主導と子ども主導の園外保育では活動の違いはあるのか、どういう体験が子ども達の『たのしい』に繋がるのか、園外保育を終えるたびに疑問に思うことが多々でてきた。

本園の特色でもある園外保育に注目し、園外保育での自然体験を通して様々な子どもが感じる『たのしい』に着目し、多くの園外保育の記録の中から子どもたちの姿、行動、言動を読みとり、今後の園外保育での自然体験がさらに楽しく魅力的なものとなるようにとの願いから主題設定としこの研究を進めていくことにした。



(2) 方法

①保育中の子どもの音声データの分析：5月に行った園外保育4回の活動の様子をボイスレコーダーを用いて子どもたちの声を拾い、楽しいを表現している声や言葉を見つける。

②保護者へのアンケートによる聞き取り：アンケートでは、子どもが自発的にどんなことを話しているのかを知るため、保護者の方には事前に子どもたちに園外保育どうだったかを聞かないでほしいことを伝え、アンケートに答えていただいた。

③保育形態の相違による子どもの観察：保育者が設定した園外保育と子どもと一緒に考えた園外保育では、楽しいに違いがあるかどうかを比べてみた。同じ場所鳥取出合いの森に出かけ、保育者が設定したおねを歩く園外保育と、子どもと一緒に前もってしたいことを考えて遊んだ日を比較して行動・言動から見えてくる楽しいを探った。

(3) 結果と考察

①保育中の子どもの音声データの分析

1回の録音時間は約4時間から5時間の4回分。子どもたちのたくさんの声を集めることはできたが、音声データの量が膨大のため、音声の文字化に頭を悩まされ、楽しいを探ることはできなかった。

②保護者へのアンケートによる聞き取り

アンケート結果を8つの要素(人と一緒にする・役に立つ・面白い・成果が出る・報酬がある・適度な挑戦である・発展性がある・取り組みやすさ)に分類した。その結果を見て、子どもとの関りが深くなっている年長だからこそ、人と一緒にするであったり人と関わったことを家庭でよく話していた。そのような経験が楽しい要素になっているのだと感じることができた。

また、報酬があるという要素にも多く分類できた。本園では山歩きのときによくご褒美でゼリーなどを持っていくが結果を見て、物の報酬だけでなく頂上で見た景色や発見したという達成感や満足感があるだけでも子どもたちは楽しいを感じているのかもしれないと思うことができた。

アンケートを通して園外保育での出来事を知らない保護者の方と共有したい気持ちがあるからこそ、家庭でたくさん話をしていることも知ることができた。園ではあまり言葉に出さない子どもたちも一人一人園外保育でいろいろなことを感じていることがよく分かった。

③保育形態の相違による子どもの行動観察

子ども主導で活動を考えた時には、したいことを口々にして持ち物も何がいるのかみんなで相談して確認していた。出会いの森では、広い広場を何回も走ったり、かくれんぼをしたり、虫探しをしたり思い思いに満喫している子どもたちだった。

さらに、保育形態の相違による子どもたちの行動観察を調べるために、保護者アンケートの結果を保育者が設定した園外保育と、子どもと一緒に考えた園外保育の活動に分けて分類したところ、子どもと一緒に考えた園外保育の活動をした時の方が家庭での話の中で楽しかったと言っていることがとても多かった。

自分のしたいことができる、できたという主体性や達成感がこのような結果につながったのかなと感じている。

④事例報告：今回の研究で園外保育後に行ったアンケートや園外保育中の子どもの姿から見えた、子どもが感じる『たのしい』がよく分かるエピソードが2つあった。

〈エピソード① 「K君(6歳)の見た景色」〉

虫探しや体を動かすことが好きなK君は家庭でも自然体験をよくしている。そんなK君にとって園外保育での山歩きは好きな活動で、楽しみにしている様子があった。K君は自分の気持ちを積極的に伝えることはあまりないため、園外保育の感想を聞いても「楽しかった」と言うだけで、詳しくは話してくれない。そのため園外保育でどういう体験がK君にとって『たのしい』につながっているのか疑問に思っていましたが、保護者アンケートを行ってみて少しほんわかした感じでした。

【久松山登山保護者アンケート】

- 前日の様子：準備についておにぎりの量、お茶の量、服は前日に自分で選んでいた。
- 降園後の会話：①頂上に行かないと見えない景色があるから今度一緒にいこう！②細い道やクネクネみちがある③道中出会った虫や植物の話や、頂上で食べたみんなのおにぎりの大きさや数などたくさん話してくれた。
- 前日、当日の朝、降園後の様子：普段はなかなか起きられないのに、当日の朝は朝6時に起きて、テキパキ着替えてもりもりご飯を食べていた。そして元気よく出発。帰ってから登山の話をたくさんしてくれた。頼もしく感じた一日だった。

《考察》

この度の試みで、園ではあまり話さないK君が家庭では家族に聞いてほしくて様子を細かく話していくことを知った。はじめて登る久松山にワクワクし、大変な思いをしながら頑張って登り、頂上まで登れた達成感や喜びを感じていた。だからこそ頂上で食べたおにぎりのことや景色のことをたくさん話していたのだと思う。K君にとって、頂上まで行かないと見ることができない景色をまた見たいと家族に伝えた行為から楽しさを感じることができた。幼児が発する「たのしかった」の背景を共有、共感することの大切さを改めて感じることができた。

〈エピソード② 「やっと願いがかなったT君(5歳)」〉

運動や歩くことより、制作や友だちと大型積木で遊ぶことが好きなT君。園外保育の移動中、前の子との間が開き、気が付けば最後になっていることがある。【疲れるからあんまり行きたくない、疲れた、山は楽しかったけど幼稚園でも遊びたかった】と言うことが多い。そんなT君だが、子どもと一緒にしたいことを考えた園外保育を行った時にはとても生き生きした姿があった。

園外保育の数日前に行き先を伝え、したいことをみんなで相談し、たくさんの意見が出てきたので必要なものを持って出かけることにした。この日、T君は紙袋を持って登園。何が入っているのか聞くと「水のところで浮かべるんだ～」と数日前の部屋遊びで作っていた牛乳パック船を家から持つて来ていた。また、「水遊びがしたい」と家で話をし、当日も着いて早々「水のところであそぼう」ととても意欲的なT君。ところが、最初は広場で遊び始めた為、水の場所へはなかなかみんなが動いてくれない。水遊びがしたいT君は何度も保育者に水遊びしようと伝え、ついに自らみんなに大きな声で自分の思いを伝えることができ、念願の水遊びを楽しみ、満足したT君の姿があった。遊んだ時間は僅かだったが、帰つてからも家で「水遊びをたくさんした」と話したよう。

また、後日行った園外保育では初めてのあそび場でもイキイキと遊ぶT君の姿を見ることができた。この日は山を切り開いて作ったあそび場に行き、思い思いに自然の中で遊んだ。普段はあまり遊ばない友だちと木や葉っぱを使い、自然の中で役になりきっておまかごとを楽しんでいた。

《考察》

動画を見てわかるように自ら目的をもって出掛けた園外保育では、大きな声で自分の気持ちを伝え、積極的な姿を見ることができた。年中の時は、自分の思いを進んで友だちにアピールすることが少ないT君だったので、今回の姿にとても驚いた。したいことを自分たちで決めることで、目的が具体化されて園外保育がより楽しみになり、したいことや自分の気持ちが友だちに伝わったことで自信に溢れ、生き生きとした姿になっているのだなと思った。また、木々に囲まれた普段体験できない場所で木や葉っぱなど自然物を使い、自分で考えて遊ぶことでより、積極的になり、行動や言動から友だちと一緒に『たのしい』を感じている様子が伝わってきた。この試みを通して、改めて、子どもの『たのしい』には、主体性と協働性が大切であることを痛感した。

(4) 今後の課題

今回ボイスレコーダーや動画を通して聞き逃している声がたくさんあることに気づいた。園外保育での発見や出会いを大切にし、一緒に共感するためにも子どもの声にしっかり耳を傾けつつ聞き逃している部分にも心を寄せて関わっていきたいと感じた。また、時間に余裕をもってゆっくり活動を進めて一人一人の声やサインに気づける保育でありたいと思う。

自然を通してたくさんの『たのしい』を感じ、豊かな感性が生まれる保育をしていくために、これからも子どもが感じる『たのしい』を探っていきたい。

2. 研究討議

(1) 発表内容に対する質疑応答

「研究発表を聞いて、子どもたちと一緒に何がしたいかを聞きながら園外保育を計画するということが子どもたちの楽しみにつながって、主体性や共同性が育まれるんだなとよく分かった。保育を計画するときには、子どもたちと相談しながら一緒に作っていくということを心掛けたいと思った。」との感想が述べられた。

(鳥取ルーテル幼稚園：上杉 理絵さん)

(2) グループ討議 (4 グループ)

討議内容：年長組5月の久松山登り。この日の園外のねらいは、みんなと一緒に山を登って達成感を味わうという設定。楽しいとわかる姿や言動を付箋に書き出し、似ている姿の付箋を8つの要素に分ける。



〈討議結果の発表〉

①久松山が園の近くにあるという地域資源を使った園外での遊びというところを展開してという意味では、園によっていろんな地域資源があって、妖怪探しに行く園や銅像を見に行く園などそれぞれの園で大事にしているものや大切にしてきたものがあって、そういうものを子どもたちと大人が一緒に楽しんで共有していくところに8要素も連携していくのではないかと話した。

②話をしていた中で、成果が出る・報酬があるの2つが多かった。子どもたちが成果が出て楽しいで終わらないように、これからどうしていきたいか、楽しい、期待してこういうことがしたい、ドキドキしてこういうことをしたいという保育をこれからできたらいいなと話した。

③適度な挑戦・ドキドキする・面白い・役に立つ・が少なめで、報酬がある・発見・満足感・成果が出るところに関してはたくさん出てきた。

8要素のほかに、まだ帰りたくないという“欲求”と足がトボトボになっているという中で帰ってきたという“安心感”の新しい要素も出てきた。

④話をする中で一番多かったのは報酬。意見が出るたびにいろんなところに繋がっていくという発見があった。発見があることで、見通しが持てる。

3. 指導助言 (全体まとめ)

研究を通して何を得なくてはならないのか、今後何に生かすのか？ 自分の学びや保育に生かす気概が手に入ったというところに繋がってくる。今回の研究で大事なところは、素朴な疑問に出会うこと。あの子はどうすればいいのかなどと毎日出会っていると思う。どうすれば改善できるのか考えるのが研究であり、毎日の部分でもこういった取り組みを少しずつしていくことがすごく大事なのかと思う。そして、子どもの認知レベルがやはり影響を受けている。子どものたのしいを言語化して細かく言えるかというとなかなか言えない。今回やってみてもそうだが、直接聞いてもたのしかったで終わっている。結局のところ言語化という形や文字として促している部分での限界はあることを再確認できたのは大きかったと思う。

音声データについて：長時間のため欲張りすぎていた。園外前、園外途中、園外後と時間を決める必要がある。普段聞き逃していた子どもの声に気づけたのは素晴らしい。

保護者アンケートによる聞き取り：園と保護者との信頼関係があるからこそいろんな声が出てきたというところは面白いと思った。保護者からもらったコメントで子どもは『たのしい』をたくさん出してくれたが、結果的に子どものたのしいは？山登りのたのしいは？自分たちで行ったときのたのしいの特徴はどんなものだったんだろうというところまで見えてると、もっと素晴らしい研究になるのかなとも思う。

保育形態の違いに対して：大きな違いが出てきたというところで、なるほどなと考えさせられた。しかし、自由遊びしすぎると運動しない子が出てくるため、時には保育者の積極的な介入が必要。

